

園番号 615

平成30年度 奈良市立富雄北幼稚園 研究実践概要

園長名 香川 幸美  
全園児数 62名

1. 研究主題

友達と一緒にやり遂げる子どもをめざして  
— 環境の工夫と保育者の役割 —

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

明るく活発で、興味のある事には自ら進んでかかわったり、集中して取り組んだりする子どもたちが多く、その反面、初めてのことに抵抗を感じたり、興味のないことやうまくいかないことがあったりすると、すぐに諦めてしまうことも多い。そこで、友達とかわりながら、最後まで諦めずにやり遂げる子どもたちを育てていきたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもは環境とかかわりを深めていく中で様々なことを学んでいく。子どもが意欲的に遊びを展開し、取り組む中で達成感や喜びを味わうことが、やり遂げる姿にもつながるのではないかと考え、そのために必要な環境の構成や保育者の役割とはどのようなものかを探る。

②研究の重点

- やり遂げる子どもの姿とは、どのような姿なのか明らかにする。
- 子どもがやり遂げる姿に向かっていくための、環境の工夫や保育者の役割を、保育者間で探る。

③活動の方法

○ねらい 環境の工夫・保育者の援助 やり遂げる子どもにつながる姿 子どもの育ち

【事例1】「大きいプールをつくろう」 5歳児 6月 友達の思いに寄り添う

- 友達と思いを出し合い、プールのイメージを共有する。
- 友達と一緒に、大きいプールをつくるために力を合わせる。

土山の近くで、A児B児が「暑いな」「プールに入りたいな」と話していた。遊びが始まる様子がないので、保育者は泥団子づくりをしている別のグループを指して「〇〇ちゃんたちの泥遊び気持ちよさそうだね。プールに入っているみたいだよ」と提案してみた。「じゃあここでプールをつくろう」とA児たちは土の上にホースで水をまき始めた。水がたまらずに流れていくので、二人は困って保育者に「水がたまらない」と助けを求めた。「どう

したらいいのかな」と保育者は二人から考えが出るのを待っていた。A児たちと保育者が水を使って遊んでいる様子を見に来たC児が「周りを高くしたらいいのかな」と言うと、同時にA児も「もっと穴を掘ったらいいと思う」と言ったのでその場にいた子どもたちはそれぞれにスコップや手で穴を掘り始めた。保育者はC児の思いを「高くするってどんな感じかな」と声に出しながら形になるように少し土手をつくってみた。「それでいいと思う」とC児もつくりはじめた。そのやりとりを見て他の子どもたちも土手をつくりはじめた。「どんなプールにするの」と保育者が問いかけると「大きいプール」とA児が答えた。思い思いにプールづくりをしていた子どもたちだがA児に続いて口々に「ここに大きいプールつくろう」と賛同し、穴を掘りながら土手で囲んで大きいプールを一緒につくり出した。しばらくして、足首まで入ることができるたたみ一畳程のプールができあがった。子どもたちは「やったー！できた！」と満面の笑みでプールに入ると友達と顔を見合わせて「気持ちいいな」と喜び合っていた。



#### (反省・評価)

誰かと遊びたいけれど、自分からかかわりにくかったり、困ったことがあると保育者に頼りがちだったりする子どもが多く、保育者は遊びの中で自分の思いを実現させてほしいという思いを持っていた。保育者が「やってみよう」という思いを引き出したり、じっくり考えられるように待ったりすることで、一人一人が自分の思いを出して遊んでいた。相手に自分の思いを伝えたことで、友達とプールづくりの目標を共通理解することができ、友達と一緒にできた、という達成感や満足感を感じることができた。

#### 【事例2】「ドングリがゴールまで転がるには…」 4歳児 11月 **繰り返し試す**

- 友達のしていることに興味を持ち、思いを伝えながら一緒に遊ぶ。
- ドングリが転がるよう、自分なりに考えたことを試して遊ぶ。

ドングリ拾いの散歩や園庭でたくさんのドングリを拾い集め、いろいろな遊びに取り入れていた。A児が制作の材料にあったラップ芯を見付け、ドングリを入れてみると出てきた。それを見ていたB児C児が「もっとつなげてみようよ」「うん、いいね!」と言って3人で次々にラップ芯をつなげていった。長くつなげた後、ドングリを入れてみるが途中で止まって出てこない。入れたところを上を持ち上げ転がそうとしていたので、保育者はそばに脚立を用意しておいた。子どもたちは脚立に立てかけてみるがドングリは出てこない。保育者はここで遊びをやめてしまわないかと思い、テープの止め方を提案したり、「もっと高い所はないかな」と声をかけてみたりした。するとA児は「あそこはどうか」と園庭で



一番高い複合遊具にラップ芯のコースを持って行き、一番上まで登り転がした。その様子を見ていた他の友達も来て一緒に遊びだした。上に登った子どもが下で待っている友達に「行くよ!」と声をかけてドングリを転がすと「わあ、出てきた!」と下にいる子どもが喜んだ。転がした子どもも遊具の上で喜び、次々にドングリを転がした。保育者も「出てきた、すごいね!」と子どもたちの喜びに共感した。後日、子どもたちはまた増えたたくさんのドングリを持ち、ジャングルジムで転がしてみようとトイを用意していた。トイは一つでは地面まで長さが足りないのいくつも持って来てつなげ、

「椅子持ってきたよ、トイの下に置いてみようか?」「そうだね」「そうしよう」と友達と話しながらコースをつくって、何度も転がし、繰り返し遊ぶ姿が見られた。

(反省・評価)

保育者は、ドングリを転がしたいという子どもの思いを受け止め、子どもと一緒に考えたり使う物を用意したりした。また、できたことを認めたり、思いに共感したりすることを大切にすることで、遊びが展開してからは、保育者が手伝わなくても自分たちだけで試してみる姿につながった。様々な場所、用具で試し、下まで転がる達成感を味わえたことは「もっとやってみたい」という意欲につながった。

### 【事例3】「コマ回し大会しよう!」 5歳児 1月 **納得できるまで挑戦する**

- 諦めずに、何度もコマ回しに挑戦しようとする。
- 友達と競い合う楽しさを感じながら、自分の力を発揮しようとする。

投げゴマが回せるようになったA児の周りでは、数人がコマを回すコツを教えてもらって一緒にコマ回しをしていた。その様子をまだ回せないB児もコマを持って遠くから見ていた。数日後、回せるようになった子が増えてきて、誘い合ってコマをするようになっていた。登園後、外へ友達が遊びに行く中、B児は外へ出ず、投げゴマを黙々としていた。なかなか回りそうでは回らなかったが、何度も繰り返し、挑戦していた。何度目かで初めてコマが回り「やったあ!」と声を上げ、保育者も「回せたね」と一緒に喜んだ。回せるようになったため、友達が誘い合ってコマ回しをしているところに、B児も自分から入っていき「B君も回せるようになったんや」と、友達に言われてうれしそうな様子でコマを回していた。

クラスみんなでコマ回し大会をすることになり、「せーの」でコマを回すと、C児のコマが一番長く回り、「今日はC君がコマ名人やったな」とみんなで話していた。B児のコマも回っていたが、途中で止まりそうになり、自分で手を出して止めてしまった。二回戦目をするときにはB児が「どうせCが一番やろ」と言って、コマと紐をぐちゃぐちゃにして、その日はコマ回し大会に参加しなかった。保育者は「さっきは悔しかったんだね。次もやってみないとわからないよ」「やる前から諦めるのは、悲しいな」と、B児の気持ちに寄り添いながら、励ましの言葉をかけ、B児の様子を見守ることにした。数日間、B児は友達とコマ回しをすることは無かったが、一人で何度もコマを回していた。再び、コマ回し大会をすることになり、B児も参加して、みんなで「せーの」で回すと、C児が一番長く回った。B児は「もう一回しよう」と、二回戦に向けてコマの紐を巻き始めた。その日のコマ大会では、B児が一番長く回ることには無かったが、「キノコ回しで回った」「ぶつかったけど止まらなかった」と言いながら、何度も回し、その後も友達と誘い合ってコマ大会をしていた。



(反省・評価)

できないことに挑戦することを躊躇したり、うまくできないことを見られたくない気持ちが強かったりするB児が、自分から繰り返しコマ回しに挑戦し、回せるようになったこと、友達に認めてもらったことで自信を感じていた。しかし、コマ回し大会で一番になれず、悔しい気持ちをうまく表現できずにいた。保育者は気持ちに寄り添い、B児自身が気持

ちを切り替えられるのを待つようにしたことで、自ら悔しさをバネに自分で納得いくまでコマ回しに挑戦する姿が見られた。

## 5. 研究の成果

やり遂げる子どもにつながる姿や経験を次のように捉えた。

4歳児では、「できた」という小さな成功体験を積み重ねていくことで、満足感を味わい、次の遊びへの意欲が高まっていく姿である。

5歳児では、うまくいかないことも経験し、失敗しても諦めずに繰り返し挑戦する姿、すぐにできるものではなく、友達と一緒に考えたり力を合わせたりすることで「できた」を感じる。その中で満足感や達成感を味わい、友達と共通の目的を持ち、自分たちで遊びを展開していこうとする姿である。

環境の工夫としては「やってみたい」と思える環境づくりが必要であり、それには、子どもたちが疑問に思ったこと、やりたいと思ったことを見逃さず、子どもの興味や経験を理解し、それに応じた素材や場を用意する。

保育者の役割としては、やり遂げようとするための意欲を育てていくことが求められる。そのために、4歳児では、「できた」の思いに共感したり認めたりし、成功体験につながる提案や援助をするようなかかわりが必要である。5歳児では、子ども自身が目標に向かって取り組んだり、課題を解決しようとしたりする姿を見守り、子どもが自分で考えられるような助言をするかかわりを大切にしていける必要がある。

「やり遂げた」結果を求めるのではなく、やり遂げようとする姿につながる様々な経験を積み重ねていくことができるよう、保育者は子どもの気持ちに寄り添い、環境を構成していくことが必要であることを再確認した。

## 6. 今後の課題

子どもが遊びを積み重ね、興味や意欲を継続させていき、遊びの楽しさを感じると共に、目標に向かって取り組んだり、課題を解決したりできるように、援助や環境の構成をしてきたことで、一人一人がやり遂げた満足感や達成感を感じることができた。今後も、引き続き友達と一緒にやり遂げる子どもを目指して、発達の過程に応じた環境の工夫や、保育者の役割、援助の在り方を追究していきたい。